

Nathanael West 研究

——孤独な Miss Lonelyhearts——

今 井 夏 彦

1933年に出版されたウェストの *Miss Lonelyhearts* は、きらめき屈折する豊富なイメージにより、当時のアメリカ社会の呻きをあらわに伝えている。新聞の人生相談の回答者である主人公 Miss Lonelyhearts は、相談者の悲惨な現実を目の当たりにするが、ただひたすら紋切り型の回答を与えることしかできないというジレンマに陥り、あげくのはてに投書者のひとりのトラブルに巻き込まれ、おかしくも哀れな最期を遂げる。

発表時には、そのアメリカ文学には希有な手法ゆえか、一部を除きあまり世評に上ることはなかった。しかし、ウェストと親しかった詩人の William Carlos Williams は、もしあのような事故がなく作品を書きつづけていれば、ウェストは “the finest prose talent of our age” となったであろう、と述べている。⁽¹⁾ その後1950年代に入り、作品集が出版されると、そのすぐれて先見的な姿勢が脚光を浴びるようになった。例えば、Stanley Edgar Hyman は、*Miss Lonelyhearts* を、F. S. Fitzgerald の *The Great Gatsby*, E. Hemingway の *The Sun Also Rises* と共に、20世紀アメリカの三大小説のひとつだと評価し、これらの作品に共通する要素を挙げている。“a lost and victimized hero, a bitter sense of our civilization’s falsity, a pervasive melancholy atmosphere of failure and defeat”⁽²⁾ ここに見られる共通項は、いずれも現代社会に対する苦い認識であるが、小説家はこのような認識を超えた世界観を持つべきだとする Colin Wilson は、その自己像の欠如を理由に、ウェストを否定的にとらえている。⁽³⁾ たしかに、ウェストの作品はことごとく暗く悲しい。だが、その底には、人間存在に

対するある「哀しみ」の郷愁がじっと息をひそめてわれわれを待ち受けている。この「哀しみ」を感じることは、文学作品を読む際の不可欠な体験であり、ウィルソンのアプローチはやや性急にすぎる裁断ではないだろうか。⁽⁴⁾

あるいはまた、現代のアメリカ批評界を代表する Harold Bloom は、昨年度刊行された彼自身の編集による *Modern Critical Interpretations: Nathanael West's Miss Lonelyhearts* の“Introduction”において、この小説をしのぐのは W. Faulkner の作品ぐらいだと激賞している。ブルームは、ウィルソンが否定し、ハイマンによるとウェストの業が依って立つところだという“his (=West's) vulgarity and bad taste, his pessimism, his nastiness”⁽⁵⁾ にこそ真価が見られると、ハイマンの論を認めながらもこれを修正している。⁽⁶⁾ ただ、ユダヤ人であるブルームの場合、近年は、*Kabalah and Criticism* (1975) や *Agon: Towards a Theory of Revisionism* (1982) といったその民族的伝統を前面に打ち出した著作が目立つ。この“Introduction”においても、“West, born Nathan Weinstein, is a significant episode in the long and tormented history of Jewish Gnosticism,”⁽⁷⁾ と述べ、ウェストをユダヤのグノーシス思想史の中に位置付けてブルーム独自の新たな論点を示し、さらに、20世紀におけるカバラ思想の再評価の端緒を開いた Gershom Scholem の“Redemption Through Sin”というエッセイが、*Miss Lonelyhearts* の“the best commentary”だと紹介している。⁽⁸⁾

この意味では、自らのユダヤ性を嫌っていたウェスト自身が、疑いなく「ユダヤ的」な作家だったことは皮肉というほかはない。それでも、*Miss Lonelyhearts* の完成度においては、同じユダヤ系のペロー、マラマッド、ロス、メイラーも及ばない、とブルームは付け加えている。⁽⁹⁾

前作 *The Dream Life of Balso Snell* では、Balso Snell という一個人の歪んだ生を夢に託して描いたウェストの眼は、大不況期ということもあって、次第にそのような社会における「大衆」へと向けられてゆく。この“disorders in the public world”⁽¹⁰⁾ をしかと意識したウェストにとって、

ホテルは格好の職場だった。マネージャーの立場で、ウェストは、多くの客のプライベートな部分まで垣間見ることができた。⁽¹¹⁾ 客達は “wonderful characters for fiction” になるだろう、とウェストは友人に語っている。この頃、あるコラムニストから実さいの読者の手紙を見せてもらうことができ、*Miss Lonelyhearts* の構想が徐々にかたちを取り始める。

この段階でウェストは、未発表の小品を数篇残している。まず、雑貨卸し売り商の店員が主人公の “Adventurer” では、彼の人生は楽しい fantasies を残がいのように心に貯えることに費され、その「冒険」はそのようなもろもろの daydreams から成り立っている。また、“Mr. Potts of Pottstown” の Mr. Potts は、*Hunt Club* をつくるが近くの森に狩るべき獲物がいない。そこで fantasy をハントし、架空の “heroic deeds” を物語る武器や本に埋もれた博物館のような家に住んでいる。彼の意識の中では、情熱的な Quixote-Potts と静かな Sancho-Potts の二つの自己が、同時に存在している。さらに、大恐慌期に、地上でプロレタリア革命が成功していない唯一の場所チベットにおける上流階級の生活を描いた “Tibetan Night” という夢物語、そして、相互にまったく関係がないが、太陽がそれらの偽りと幻想を露わにするさまざまなエピソードから成る “The Sun, the Lady, and the Gas Station” などの短篇である。⁽¹²⁾

これらの作品には、上べは滑稽であれ悲しくあれ、その背後に恐怖に根差すヒステリカルな笑いが存在する。⁽¹³⁾ この震えおののくような「笑い」と同質のものが、*Miss Lonelyhearts* (以下 Miss L. とする) の元に寄せられる手紙や、彼の上司 Shrike の常に放つ冗談等に明らかに見てとれる。また、短編の中の登場人物の名 (Joe, Potts, Harry) が一般的であるのは、大衆の状況を示唆していると考えられ、Miss L. が匿名に終始したという事実極めて近いものがある、と言えよう。⁽¹⁴⁾ こうして、ウェストは、着々と *The Dream Life of Balso Snell* から *Miss Lonelyhearts* へその歩みを進めて行く。

Balso Snell の “dream life” は、トロイの木馬の胎内を舞台としていたが、Miss L. のさまよう空間は主に1930年代のニューヨークとなり、架空

の時と場所が具体的なもの変わった。さらに、これに続く二つの作品にも、都市に集う人々が描かれている。*A Cool Million* の Lemuel Pitkin は、American Success Dream を信じて田舎からニューヨークへやって来た若者であり、*The Day of the Locust* では、“people who come to California to die” の暴動で幕が閉じられる。このラストシーンの黙示録的な暴動は、たしかに Miss L. に助けを求める手紙の書き手に予兆されている。⁽¹⁵⁾ こうして都市に集まった民衆の姿は、Miss L. が Betty の郷里から心の傷が癒えないまま戻り、スラム街に行き交う人々を眺めている情景に、悲しいほどみごとに描写されている。

Crowds of people moved through the street with a dream-like violence, As he looked at their broken hands and torn mouths he was overwhelmed by the desire to help them, and because this desire was sincere, he was happy despite the feeling of guilt which accompanied it.

He saw a man who appeared to be on the verge of death stagger into a movie theater that was showing a picture called *Blonde Beauty*. He saw a ragged woman with an enormous goiter pick a love story magazine out of a garbage can and seem very excited by her find.⁽¹⁶⁾

ベティによれば、Miss L. の病いは“city troubles”であり、彼はベティの誘いによって、彼女の生まれたという農場で数日過ごす。自然に接し英気を養ったはずの Miss L. であるが、ニューヨークに戻ってみると、やはり手紙のことを忘れるのは不可能だと悟る。「手や顔を怪我している者」、「今にも死にそうにみえる男」、「ぼろをまとった女」などが、“a dreamlike violence”を伴ってうごめいている。「裏切られた」人々の群れである。こうしてウェストは、見失われた自己だけではなく、そのような一般大衆を、そして行方知れず漂う社会そのものを活写しようと試みた。

もはや、この作品の中心テーマが “the suffering of the lonely crowd”⁽¹⁸⁾ であることは明らかだろう。繰り返すが、そのための取材には、さまざまな階層の老若男女が過客となるホテルは、作家ウェストには願ってもない職場であっただろうし、また、新聞の身の上相談の回答者という設定は、ストーリーの展開上、秀逸な着想だと思われる。

言うまでもなく、Miss L. のアドバイスを狂おしいほどに求める人々は “completely innocent victims”⁽¹⁹⁾ である。彼らの苦悩は、彼らの力を超えている。さりとて、Miss L. のみならず誰ひとりとして解決できない代物である。Miss L. に出来ることは、ただ虚しい言葉を回答欄に並べるだけである。始めは、冗談のつもりで書いていた Miss L. も、次第に、無意味だとわかっている言葉すらも紡ぎ出せなくなってくる。Miss L. も、同じように犠牲者の資格を持つゆえんである。

しかも、彼は “the Christ Dream” を見ることができたために、深刻な事態をむかえるはめになってしまった。だが、宗教でも悩める者を救うことはとうていできない。いくら Miss L. がそれらしい回答の原稿を書こうとしても、それは「輝いてはいるが何の役にも立たない空のビン」のようなものだ。⁽²⁰⁾ 気持にゆとりができない以上、「キリスト稼業」から足を洗わなければならない。ところが皮肉なことに、彼は牧師の息子であり、旧約ふうの容貌をしている。それに、何といても “Christ was Shrike’s particular joke.”⁽²¹⁾ なのである。Miss L. は意に反して、“the dead pan” 「無表情な顔の男」シュライクの犠牲となってしまった。⁽²²⁾ もともと、Miss L. をこの担当に回したのはシュライクであり、彼はあらゆるものをことごとく揶揄の対象にしてしまう。その意味では、確かに “a master comedian and ironist”⁽²³⁾ であることはちがいない。だが、“the dead pan” の呼称が示すように、他人に対する憐れみといった情感に欠けるところがある。Miss L. の顔を見れば声高に演説を始める (shriek 「叫ぶ」) Shrike は、James F. Light などが指摘するように、獲物を木の枝に突きさしておくという鳥のモズ (shrike) に倣いする。⁽²⁴⁾ しかも、犠牲者である Miss L. にとって、彼の詭弁に翻弄されながらも、常に気懸かりな存在として不信の神の

替わりに Shrike (Christ と発音が酷似している) が現出する、という事実は、アイロニーの極みと言えよう。⁽²⁵⁾

この作品そのものを、また Miss L. の運命を象徴するような章である “Miss Lonelyhearts in the dismal swamp” は、病床に就いている Miss L. の描写で始まる。見舞いに訪れたベティが彼に転職をすすめるが、この仕事を辞めても悩める人々の手紙を忘れることはできない、と Miss L. は説明する。これに対して、ベティは幼い日々を過ごした農園の話をし、自然の中で暮すべきだと彼を説得する。そこへ、酔ったシュライクが飛び込んできて、長広舌を揮う。シュライクは、Miss L. が現実を逃避していると決めつけ、さまざまな取るべき道を論じかせる。まず「大地」へ、次に「南の海」へ、あるいは「快楽の追求」を、さらに「芸術」、「自殺」、「麻薬」などを並べ立て、ついには、“God alone is our escape” と言い切り、最後に Miss L. がキリストに出す手紙を口述してみせる。“Dear Miss Lonelyhearts of Miss Lonelyhearts—I am twenty-six years old and in the newspaper game. Life for me is a desert empty of comfort...”⁽²⁶⁾

延々と演説をぶつシュライクと終始沈黙を守る Miss L. の対決を示すこの場面は、小説におけるひとつのクライマックスと言える。しかし、Marc L. Ratner や Light が述べているように、この箇所は、フランスの象徴派詩人のひとりであるボードレールの「パリの憂鬱」にある1節 “Anywhere Out of This World” のアナロジーである。⁽²⁷⁾

この散文詩は、すでに前作 *The Dream Life of Balso Snell* の冒頭に見受けられる。Balso Snell が「トロイの木馬」を見つけてその胎内に入りこみ、気をまぎらすために即興の歌を作るが、そのタイトルのひとつとして挙げられているのが、ボードレールのこの詩である。そこでは、この世が病院に譬えられ、患者たちはベッドの交替を願っている。そのうちのひとりが己れの魂を相手に議論する。「聞かせてくれ、私の魂よ、冷たくなった哀れな魂よ、リスボンに行って住むのはどうかね?…」 「魂」は答えない。「私」は「魂」に、「オランダ」、「バタヴィヤ」、北欧の「トルネオ」、さらには「北極」と問い掛けるが、「魂」は返事をせず、とうとう憤然

としてどなる。「どこでもかまうものか！ この世の外でさえあれば！」⁽²⁸⁾

シュライクは Miss L. に、「私」は「魂」に執拗に語りつづけるが、Miss L. はベッドの上で毛布をかぶって眠ったふりをし、「魂」はなかなか答えようとしない。「魂」の最後の怒りにあらわれた「いずこなりともこの世の外」“Anywhere out of this world” が、Miss L. にとっては、所詮シュライクの説くように、とりあえず逃げ場としてのキリスト、偽りのキリストしかないという結果におちつくわけである。

ベティとの田園行きが失敗に終ると、Miss L. は、自分の謙虚さの不足を反省する。⁽²⁹⁾そこで、いわゆるアガペーとしての「愛」によって、キリストとの一体化を図る。そうすれば、「カラマーゾフの兄弟」のゾシマ長老の語る言葉に対しても従順になれるかもしれない。⁽³⁰⁾ Miss L. は、この「愛」を、相談者のひとりドイル夫人を通して知り合った夫のドイルに試みようとする。ドイルは、ガス会社のメートル調べをしている脚が不自由な小男であり、彼もまた、“lost masses” のひとりである。Miss L. は、行きつけの酒場のテーブルの下で、このドイルの手をしっかりと握りしめ、⁽³¹⁾彼の試みは実を結ぶかに見える。しかし、最終章において、Miss L. とドイル夫人の関係を誤解したドイルが、突然訪れ、Miss L. は全ての悩める人々を迎えるように手を差しのべるが、もみ合っているうちにドイルが隠し持って来たピストルが暴発し、ふたりとも階段の下に転げ落ちる。⁽³²⁾あまりにも滑稽でアイロニカルな幕切れである。キリストとの一体化という祈りは無残にも破れ、絶望という言葉のみ適応しい最後である。

と同時に、この転落は単なる空間の転落ではない。さまざまな意味をもつ、多層的な “a dying fall” である。作品の冒頭で、“help me” とあえぎつつ、それぞれの苦悩を訴える手紙になかなか筆が進まず、やっと終えた Miss L. が、第2章で酒場へ行く途中に小さな公園を通る。その公園の描写は、必ず指摘されるように、明らかに T. S. Eliot の20世紀を代表する詩 *The Waste Land* を意識したものである。“As far as he (=Miss L.) could discover, there were no signs of spring. The decay that covered the surface of the mottled ground was not the kind in which life gener-

ates.”⁽³²⁾ *The Waste Land* における世界は、救いの滋雨による再生の可能性をわずかたりとも残していたが、この場面での公園の生命の蘇りには、雨も役に立たないという。⁽³⁴⁾

Suddenly tired, he (=Miss L.) sat down on a bench. If he could only throw the stone. He searched the sky for a target. But the gray sky looked as if it had been rubbed with a soiled eraser. It held no angels, flaming crosses, olive-bearing doves, wheels within wheels. Only a newspaper struggled in the air like a kite with a broken spine.⁽³⁵⁾

Miss L. は、シュライクの「読者にパンを与えるのではなく石を投げつける」というアドバイスを思い出し、空を見上げるが、その石を投げる「標的」がない。神を象徴する「天使」や「燃える十字架」や「オリーブをくわえた鳩」なども存在しない。「骨の折れた凧のように空中でもがいている新聞紙が一枚」漂っているだけである。⁽³⁶⁾つまり、Miss L. にとって、神への不信感もあり、また怒りや苛立ちをぶつける的がなく、戦おうとしても挑むべき相手が見つからないのと同様、この公園における描写は、“out of order” の世界におけるなすすべのない虚無的な状況を示唆している。エリオットは、この世に「荒地」を見い出したが、ウェストはその確認をするしかなかった。その世界は、Volpe の述べるように、とくに第二次世界大戦後に広く知られる “The Absurd” 「不条理」という言説で言い尽くせるかもしれない。⁽³⁷⁾

Miss L. にできるのは、joke によって気をまぎらせることだけである。⁽³⁸⁾

“Ah, humanity...” But he (=Miss L.) was heavy with shadow and the joke went into a *dying fall*. He tried to break its fall by laughing at himself..⁽³⁹⁾ (下線部は筆者)

極言すれば、この1節に小説のすべてが集約されている、といっても過

言ではないだろう。Miss L. は、人生相談の相手役という仕事を、どうしても真摯な態度で受け取めてしまう。シュライクを真似て、戯れの言辞を弄そうとするが、それも消え行ってしまう。“went into a dying fall”)そこで、自嘲の笑いを浮かべる以外にできることはない。何と寂しい認識だろう。さらに、この“a dying fall”を基調音として、ラストシーンの Miss L. の文字通りの「転落」へと、悲劇の狂想曲が忽ちのうちに展開される。

いずれにしても、この作品が、何かの「終り」を潜在的な主題としていることは言を俟たない。あるいは、その「終り」はまだ終わっていないとも考えられよう。Miss L. の“Christ Dream”は永遠に奪われ続けるほかはなく、彼の、まぎれもない死への可憐性を孕んだ“a dying fall”の行く先が“Anywhere out of this world”だとすれば、それは、ユダヤ人の宿命としての共同体の「外部」であるのかもしれないし、また、「エクリチュール」という小説空間の暗い裂け目かもしれない。ウエストの据えた作品世界は、ともするとコミカルなだけに、痛切に哀しい。Miss Lonelyhearts は、タイトルが示す以上に「孤独な」作品である。

作品は孤独である。これは、作品が伝達不可能だとか、読者が欠けているとかいう意味ではない。そうではなくて、作品を読む者は、作品を書く者が作品の孤独の冒険に属しているように、作品の孤独のかかる断言のうちに入りこむのである。⁽⁴¹⁾

Notes

- (1) Jay Martin, *Nathanael West: The Art of His Life* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1970), p. 12.
- (2) Stanley Edgar Hyman, *Nathanael West* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1962), p. 28.
- (3) 「この小説 (*Miss Lonelyhearts*) は明らかにその主要な目標—悲劇感と人生への抗議の感じを伝えること—を達成はしている。…問題は、大文学作品というのは、まったくの虚無感と絶望感からは作られ得ないということである。

…作家は自分が何を欲しないかということと同じく、自分が何を欲するかということについて考えを持っていなければならない。ウェストは人生にまったくうんざりしているので、『あらゆること』が彼に吐気を催させる。…しかしこういった否定すべてに拮抗すべき肯定的な極が一つも見当たらないのだ。」Colin Wilson, *The Craft of the Novel* (1975)「小説のために」鈴木建三訳(紀伊國屋書店, 1977年), p. 21.

- (4) ウェスト自ら、自分を“comic writer”と呼んでいたことも考えなければなるまい。コミカルな存在の背後には、必ず哀しみがひっそりと寄りそっている。
- (5) Hyman, p. 46.
- (6) “Hyman remains West’s most useful critic, but I would amend this by observing that these qualities in West’s writing emanate from a negative theology, spiritually authentic, and given aesthetic dignity by the force of West’s eloquent negations.” *Modern Critical Interpretations: Nathanael West’s Miss Lonelyhearts*. Harold Bloom ed. “Introduction” (New York, New Haven, Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1987), p. 2.
- (7) Bloom, p. 1.
- (8) *Ibid.*
Gnosticism とは、ヘレニズム時代に地中海世界で興った宗教思想運動である。グノーシス (gnōsis) はギリシャ語で「知識」を意味し、ここでは人間を救済に導く究極の知識を指すが、本質的には、ギリシャの異教かユダヤ教神秘主義に由来する宗教運動である。Kabbalah (Cabala) は、ヘブライ語のカバル (Kabbal) に基く言葉で「受け取る」の意味を持ち、少数の選ばれた者たちに「伝承されたもの」を示すが、広義のカバラとはいわゆるユダヤ神秘思想全般を含む。
この方面からのウェストの作品へのアプローチは今後の課題としたい。
- (9) *Ibid.* pp. 1-2.
- (10) Martin, p. 173.
- (11) とりわけ興味を引かれたときは、その客の手紙まで蒸気を使って盗み見ることを辞さなかった、という。*Ibid.*, p. 166.
- (12) *Ibid.* pp. 168-71.
- (13) “That kind of uncontrollable, hysterical laugh in the face of terror, the misshapen visage of things, runs fitfully and uneasily beneath all these stories, whether their surface is comic or tragic. It is a laugh rising out of a horror, …” *Ibid.*, p. 172.
- (14) *Ibid.*
- (15) “The apocalyptic riot that ends *The Day of the Locust* is foreshadowed in

Miss Lonelyhearts in the shattered letter writers....” Victor Comerchero, *Nathanael West: The Ironic Prophet* (Seattle and London: Univ. of Washington Pr., 1964), p. 85.

- (16) Nathanael West, *The Complete Works of Nathanael West* (New York: Octagon Books, A Division of Farrar, Straus and Giroux, 1978), p. 115.
- (17) “He (= West) knew, as few others in his time did, not only that the individual was lost but that the masses who had defined themselves through their society were lost too, now that society itself was drifting and undefined. And he treated both themes.” Martin, p. 165.
- (18) *Ibid.*, p. 189.
- (19) Edmond L. Volpe, “The Waste Land of Nathanael West”, ed. Thomas H. Jackson *Twentieth Century Interpretations of Miss Lonelyhearts* (Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, Inc., 1971), p. 83.
- (20) “He (= Miss Lonelyhearts) felt like an empty bottle, shiny and sterile.” West, p. 129.
- (21) *Ibid.*, p. 68.
- (22) Roger D. Abrahams は、シュライクと Miss L. の恋人ベティを対照的にとらえている—“male-female, paternal-maternal, sadism-masochism.” さらに、city-country の見方もつけ加わえている。(“Shrike is the man of the city with all the attendant traits of world-weariness and sophistication, while Betty is the innocent country girl without wile.”) “Androgynes Bound: Nathanael West’s *Miss Lonelyhearts*,” *Modern Critical Interpretations: Nathanael West’s Miss Lonelyhearts*, p. 28.
- (23) Martin, p. 178.
- (24) “This lack of love and pity justifies the name Shrike, suggestive as it is of the bird that impales its prey upon a cross of thorns.” James F. Light, *Nathanael West: An Interpretative Study* (Ann Arbor, Michigan: Northwestern Univ. Pr., 1963), p. 82.
- (25) “Yet Shrike, even in his similar-sounding name, is a mock Christ, the Jesus Shrike which is all he really can have instead of God.” Martin, p. 179. 同様のことは John R. May も言及しているが、彼はさらに、シュライクを “the demise of every human value” の体現者だと論じている。“Words and Deeds,” *Modern Critical Interpretations: Nathanael West’s Miss Lonelyhearts*, p. 55.
- (26) West, p. 110.
- (27) ダダイズム、シュール・リアリズムなどの他に、ウェストに影響を与えたものとしてフランスのサンボリストの名がよく挙げられている。Rätner は、

とりわけ次の2点を記している。“The European tone of his (= West’s) writing, that is, his rejection of reform and his belief in the absurdity of existence, has its source in the French Symbolists and particularly Baudelaire.” “‘Anywhere Out of This World’: Baudelaire and Nathanael West,” *Nathanael West: A Collection of Critical Essays*, ed, Jay Martin (New Jersey: Prentice-Hall Inc., 1971), p. 102.

この論に従えば、冒頭で述べた C. ウィルソンの主張するウェストへの非難も、このあたりに起因するのかもしれない。

- (28) シャルル・ピエール・ボードレール著「パリの憂鬱」48『いずこへなりとこの世の外へ』秋山晴夫訳（筑摩書房「世界文学大系56 ポオ・ボードレール」, 1959年）, p. 305.
- (29) “He (= Miss L.) felt that he had failed at it (=dreaming the Christ Dream), not so much because of Shrike’s jokes or his own self-doubt, but because of his lack of humility,” West, p. 115,
- (30) 「罪あるがままの人間を愛するがよい。なぜならそのことはすでに神の愛に近く、地上の愛の極致だからである。神のあらゆる創造物を、全体たるとその一粒一粒たるとを問わず、愛するがよい。木の葉の一枚一枚、神の光の一条一条を愛することだ。動物を愛し、植物を愛し、あらゆる物を愛するがよい。あらゆる物を愛すれば、それらの物にひそむ神の秘密を理解できるだろう。ひとたび理解すれば、あとはもはや倦むことなく、日を追うごとに毎日いよいよ深くそれを認識できるようになる。そしてついには、もはや完璧な全世界的な愛情で全世界を愛するにいたるだろう。」フォードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー「カラマーゾフの兄弟」原卓也訳（新潮社「新潮世界文学15 ドフトエフスキーⅥ」, 1971年）, p. 378.

この引用の部分は、“Miss Lonelyhearts and the lamb”の章で、Miss L. が床に就く前にこの書を手にとって読むシーンである。しかし、この後「イエス・キリスト」の名を唱えつつ眠る夢の中で、大学時代の二人の友人と共に神に捧げる小羊を買い、最後には Miss L. がその小羊（神）を非常に兇暴な描写の中に殺すことになり、ゾシマ長老の訓えも逆効果を生んでいる。ドストエフスキーのウェストへの影響については、Light を始めとして多くの論評があるが、ここでは Randall Reid の1例にとどめ詳説は次の機会にした

- (31) “After finishing the letter, he (= Miss L.) did not let go, but pressed it (=his hand) firmly with all the love he could manage.” West, p. 126.

- (32) Martin は、ドイルがピストルを新聞紙に包んでいたことに注目している。新聞には Miss L. のコラムが載っているわけであり、いつもの言葉を綴っていたことの報いかもしれない。Martin, p. 189.
また、Miss L. がドイル家を訪問した際、ドイル夫人は新聞紙を丸めたもので夫をたたくが、二人の関係を怪しんだドイルは、その仕返しとして新聞紙でピストルを隠した、と Robert Emmet Long は述べている。Nathanael West (New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1985), p. 72.
- (33) West, p. 70.
- (34) “Neither alcohol nor rain would do.” *Ibid.*
- (35) *Ibid.*, p. 71.
- (36) またしても新聞紙である。しかも “struggled” という語をともなっていることに注目したい。
- (37) Volpe, p. 85.
- (38) “He (=Miss L.) could not move out of his despair; he could only joke about man’s attempt to curtain reality, write a satire on the Christ dream—the salvation of Eliot’s Waste Land.” *Ibid.*
- (39) West, p. 70. ここで “the joke” というのは、志村正雄によると、“Ah, humanity…”が、H. Melville の短篇 “Bartleby the Scrivner” の最後の 1 行であり、つまり、人間全体の悲惨な状態を指している。志村正雄注釈「ミス・ロンリーハート」(南雲堂, 1970年), p. 107.
- (40) やはりエリオットのよく知られている詩 “The Love Song of J. Alfred Prufrock” の中ほどに、“objective correlatives” の代表的な例として挙げられる、“I have measured out my life with coffee spoons.” の 1 行があるが、その直後に、“I know the voices dying with a dying fall.” が見つかる。本源は、シェイクスピアの「十二夜」の冒頭にあるオーシーノー公爵の科白の 1 節である。悲しい調べにたとえ、オリヴィア姫への恋の思いを吐露したものである。“it had a dying fall.”
- (41) モーリス・ブランショ「文学空間」粟津則雄・出口裕弘訳(現代思潮社, 1986年), p. 11.